

心に描いた夢は必ず実現する！

日本サッカー協会 最高顧問 川淵 三郎氏



Jリーグ
初代チェアマン
川淵 三郎氏

先月プロバスケットボール「Bリーグ」がスタートしました。Bリーグ創設に力を注いだ初代チェアマン川淵氏のニューズを見たとき、SMI国内コンベンションで特別講演されたときのことを思い出しました。Jリーグ発足の翌年1994年のことです。今では世界で活躍する選手やサッカーというスポーツが身近になりましたが、当時のJリーグへの思い、夢を実現させるプロセスなどSMIのクライアントでもある川淵氏の講演内容を二披露いたします。

お客様が興奮するようなサッカーに

1988年、Jリーグの前身である日本サッカーリーグの最高責任者になった時、日本サッカーをもっと面白く、もっとお客様が興奮するようなサッカーに変えたいと思いました。このときの現状は、プロ選手は数名であり、午後からの企業選手でした。技術的レベルも低く、国立競技場での観客数も企業が招待券を配りまくってやっと6000人、お金を払ってきてもくれるお客様は1000人位、1試合が200万位の収入しかない。入場者収入ではなく、企業の広告宣伝費や福利厚生費でサッカーチームは成り立っていたんです。それをどうアプローチしてプロ化するかが壁でした。

サッカーは、野球と違って国内だけの勝負ではだめなんですね。世界のひのき舞台でどう活躍できるかなんですが、日本サッカーは世界では通用しないし、負ける試合を国民は見たいと思わない、子供たちも国立競技場で高校選手権に出場出来たら夢を叶えたとそこのまでの夢しか描きませんでした。世界に出るためにJFAを作ったにも拘らず、通用しないから仕組みそのものを変えなくてはいけないと思いました。

「企業内スポーツ」から「市民スポーツ」へ

1990年代、オリンピックは160億人、ワールドカップは265億人の人が見えています。日本ではオリンピックが最高と思っていますが、サッカーが世界一のビッグイベントなんです。

1968年メキシコオリンピックで銅メダルを取って以来、予選突破さえしていない、会社の延長線上じゃ全然ダメ、企業内スポーツである以上世界に通用しないと思いました。

「企業内スポーツ」から「市民スポーツ」に脱皮しよう、市民が地域に根差してそこに行けばスポーツが楽しめるスポーツクラブを作ろう、その中に強いサッカーのチームがいて、地域のサッカーを皆で応援に行こうというスポーツクラブ作りをやらなければならない、変わらなないと思いました。

夢の始まりは逆風の始まり

1960年に初めてドイツに行ったとき、驚くような素晴らしいスポーツ施設を見て、同じ敗戦国なのにこんな素晴らしい施設を持っているドイツに100年経っても勝てないと思ったのが、今のプロ化への繋がっているんです。私の夢の始まりなんです。そういうものを日本に作りたくて強く思いました。その為に企業名を外し、

法人化、独立採算制で経営責任を持つようにさせ、ホームタウンを設ける。いろんな柵がありました、古い風習をすべて断ち切って最初に打ち出したら大反対されました。恥も外聞も考えず企業と激論を相当交わし、今思えばよくやったと思います。

世界に通用するために...

経営者から選手に至るまでプロ意識を持たそう、そして子供たちの夢の受け皿を作ろうと思いました。現在1000人近い中学・高校・大学生が海外にサッカー留学しています。子供たちが何の不便もなくサッカーを学べるようにしたい。

2002年にワールドカップを誘致しようという運動が出ていますが、強い日本のチームがなければできないわけがない。日本でそういう受け皿がなかったら子供たちが育つ要素がない。だからこそ高いハードルを設けてプロ化を進めて行こうと。



清水の舞台から飛び上がる！

物事を実現する場合、条件が全て揃ってやろうと思ってもできない。こんな大きな壁はステップバイステップじゃ無理。いきなり高いハードルを設けて一気に清水の舞台から飛び降りるのではなく、飛び上っちゃおうと...落ちたところで奈落の底に落とされるわけじゃない。ということ、1990年4月にプロ化の条件を出し、

10クラブからスタートし、我々の予想をいい意味で裏切ってくれて222試合入場者数412万人、100億〜120億の入場収入。全部の売上で200億円です。本当に驚いています。

最大の变化は選手の意識改革

一番大きく変わったのは、選手の意識改革です。イギリスなどは、15歳位のプロ予備軍の練習は、コーチは黙って見てほしい、首になるからです。でも私が監督をしていた日本代表の時は、「しっかりと走らんか！さぼるな！」と選手に大声を出していました。つまりやらされてるんですね。でもJリーグになって、自ら限界に挑戦するようになりました。大きな変化です。

「Jリーグ百年構想」

問題点は山ほどあります。問題点が山ほどあるのは当たり前です。Jリーグは、準備がきちりできて、全部揃ってからさあスタートしましょうなんてやっていたら百年経ってもできなかったです。走りながら考えたからこそ動いた、世の中も動いたんです。

Jリーグのあるべき姿、「Jリーグ百年構想」は、ヨーロッパのように、その場所に行けば地域の老若男女誰でもがスポーツをエンジョイできる、そのモデルとしてJリーグがあり、サッカーを通じて楽しめるというクラブハウスを目指してスタートしたばかりです。

百年なんて川淵さん生きていないでしょうと言われますが、私が最初に夢を見たのは34年前です。その夢が実現しました。「Jリーグ百年構想」、地域に根付いて市民の笑顔があるその夢は必ず実現すると信じています。(1994年SMI大会)